

- 1 そのとき、ミリヤムはアロンといっしょに、モーセがめとっていたクシュ人の女のことで彼を非難した。モーセがクシュ人の女をめとっていたからである。
- 2 彼らは言った。「【主】はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちとも話されたのではないのでしょうか。」【主】はこれを聞かれた。
- 3 さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。
- 4 そこで、【主】は突然、モーセとアロンとミリヤムに、「あなたがた三人は会見の天幕の所へ出よ」と言われたので、彼ら三人は出て行った。
- 5 【主】は雲の柱の中にあって降りて来られ、天幕の入り口に立って、アロンとミリヤムを呼ばれた。ふたりが出て行くと、
- 6 仰せられた。「わたしのことばを聞け。もし、あなたがたのひとりが預言者であるなら、【主】であるわたしは、幻の中でその者にわたしを知らせ、夢の中でその者に語る。
- 7 しかしわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。
- 8 彼とは、わたしは口と口とで語り、明らかに語って、なぞで話すことはしない。彼はまた、【主】の姿を仰ぎ見ている。なぜ、あなたがたは、わたしのしもべモーセを恐れずに非難するのか。」
- 9 【主】の怒りが彼らに向かって燃え上がり、主は去って行かれた。
- 10 雲が天幕の上から離れ去ると、見よ、ミリヤムはツァラアトになり、雪のようになっていた。アロンがミリヤムのほうを振り向くと、見よ、彼女はツァラアトに冒されていた。
- 11 アロンはモーセに言った。「わが主よ。私たちが愚かで犯しました罪の罰をどうか、私たちに負わせないでください。
- 12 どうか、彼女を、その肉が半ば腐って母の胎から出て来る死人のようにしないでください。」
- 13それで、モーセは【主】に叫んで言った。「神よ。どうか、彼女をいやしてください。」
- 14しかし【主】はモーセに言われた。「彼女の父が、彼女の顔につばきしてさえ、彼女は七日間、恥をかかせられたことになるではないか。彼女を七日間、宿営の外に締め出しておかなければならない。その後に彼女を連れ戻すことができる。」
- 15それでミリヤムは七日間、宿営の外に締め出された。民はミリヤムが連れ

戻されるまで、旅立たなかった。

16 その後、民はハツエロテから旅立ち、パランの荒野に宿営した。

☆説教

神の人モーセ（40）ミリヤムとモーセ

モーセの生涯を学んで今日で40回目です。しばらくモーセがその民とともにシナイ山に駐留している時のことを学びました。

今度は出エジプト記から民数記に移りまして、荒野での出来事を主に学んでいきたいと思いますが、今日は先ずミリヤムを取り上げてみたいと思います。

ミリヤムというのは、モーセのお姉さんです。

旧約聖書のミカ書の6章の4節、ちょっと読みます。開かなくて結構ですが、――

ミカ 6：4 わたしはあなたをエジプトの地から上らせ、奴隸の家からあなたを買い戻し、あなたの前にモーセと、アロンと、ミリヤムを送った。

と、神さまはイスラエルの民に仰いました。

出エジプト記の出来事を担ったのは、モーセだけではなかった。モーセと、アロンと、ミリヤム、この三人がいっしょに担った。

ところが、この民数記の12章の1節で、姉のミリヤムはアロンといっしょにモーセを非難し始めます。

一番最初はモーセがめとっていたクシュ人――というのはエチオピア人のチッポラー――異邦人の女をめとっているということで、非難し始めます。

そして2節に、――

2 彼らは言った。「【主】はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちとも話されたのではないのでしょうか。」

モーセに向かって「なぜあなただけが単独で指導者顔をしているんだ」とアロンとミリヤムが言い始めますね。ふたりともモーセの兄弟ですね。

ミリヤムは、モーセより10歳ぐらい年上の姉でした。

モーセが赤ちゃんの時に、生命を救うためにお母さんは、パピルスで編んだかごに入れて、ナイル川に流します。

それをじっと見守っていたのが、姉のミリヤムで、水浴びに来ていた王女の目にとまった時、ミリヤムはすぐに王女の前に出て行って、「私が、ヘブル人の乳母を連れて来ます」と進言して、本当のお母さんを乳母として連れて来たのは、ミリアムでありました。

聡明な女の子でした。行動力のある女でした。

やがて、エジプトを脱出した後、神さまの奇跡によって紅海を渡り切った時に、ミリアムは賛美を残します。

ちょっとこれは見ていただきたいと思います。

出エジプト記の15章の20節です。

私が（藤本牧師）が20節を歌いますので、（笑、訂正して、読みますので）歌ったら大変、歌うという言葉が出て来ます。21節を皆さんで読んでください。

出エジプト 15：20 と 21――

20 アロンの姉、女預言者ミリヤムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを持って、踊りながら彼女について出て来た。

21 ミリヤムは人々に答えて歌った。

「【主】に向かって歌え、
主は輝かしくも勝利を収められ、
馬と乗り手とを海の中に投げ込まれた。」

モーセが政治的な指導者であれば、アロンは祭司ですから宗教的な指導者であり、そしてミリヤムは音楽を通して、民を一つに導いていった。まだ聖書のない時代です。このミリヤムの讚美歌というのは、恐らく出エジプトの出来事で一番象徴しています。

短い讚美歌かもしれませんが、民はミリヤムを尊敬し、そしてミリヤムを慕います。

でも今、ミリヤムとアロンはモーセに対して、「なんで、あなただけが指導者なんだ。あなたの妻はイスラエル人ではない。」(と詰め寄る)。

そう言われても困りますよね。

モーセは神によって遣わされる前に、すでにチップラと結婚していました。

「今更何だ」と言われるような、小さなことを採り上げ、何もそれだけが原因でなかったに違いありません。他に原因はいくつもあったのでしょうけれども、一つのことをきっかけにして、批判は集まります。

もう30年も前ですけども、私たち(藤本牧師夫妻)がアメリカから戻って来た時に、私はあるとき、こういう風に批判されました——先生はその歳になって、挨拶ひとつ知らない。

いや、いつも挨拶しているつもりですけども、その方は日本の挨拶というのは、もっと深々とするものと仰り、あ、そうでございますかと(笑)。

アメリカの挨拶は握手とハグです。頭を下げずに7年間過ごしてしまいますと、頭を下げるという習慣がなくなってしまう。

でもその批判は、恐らく「あなたは挨拶もろくろく出来ない」だけではなくして、私のすべてに何か気に入らなかったのでしょうか。

モーセに対して気に入らないことは、他にいくつかあったのかもしれない。でもここで出て来たのは、奥さんの話で、奥さんを取り上げるとしたらモーセは何も言えない。別れるわけにも行かないし、愛しているわけだし、ずっと続けることだし、でもそんなこと関係なく、ミリヤムはモーセを責める。

その批判にモーセはじ〜っと耐えています。そのじ〜っと耐えている姿を、聖書はこういう風にしてある。

ここを今日は学んでみたいと思いますが、民数記の12章に戻っていただいて、3節——

3 さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。

謙遜であった。モーセという人は地上にあってとっても謙遜な人であったということは、ものすごく有名です。

そしてほとんどの方はいったいそれが(聖書の)どこに出て来るのか解らない。ここに出て来るのです。

それは、批判の嵐をじ〜っと耐えている場面で、「モーセという人は、誰にもまさって謙遜であった」(民数記12:3)とあります。

私たちはなかなか、こうは行きません。

教会に新しい牧師がやって来ました。

ベテランの信徒がその先生に言います。
「先生、わたしには、タラントがひとつあるんじゃないかな」
「ほう、それで兄弟、そのタラントとは何ですか？」
「批判することじゃよ。結構私の批判は厳しいぞ」

先生は言い返しました。
「兄弟、聖書の中には、ひとつだけタラントを与えたしもべの話が出て来じゃないですか。その人物は、そのタラントをどうしたと思います？外に出て行って、地に埋めましたでしょう。だからあなたも埋めて来なさい」(笑)

批判された時に、どう切り返すか、割と私たち考えますね。そして見事に切り返した時に、私たちは実にスカッとした思いをします(笑)。だけど、私たちはほとんどじっと耐えるのですね。

私(藤本満牧師)はインマヌエルという小さな群れの代表を務めさせていただいて、そして以前はしきりに発言していたのが、ただじ〜っといっつも聞いて、そしてにこやかにそれを受け止めるだけです。

ある牧師先生は「死ぬまで牧師をやりたい。それが私の使命です」。
ある先生は「できたら講壇から召されたい」——講壇から召されるというのは、救急車が教会に来るということです(大笑)。それでもいいんですか(笑)。

ある人は美学を持っていまして、「私は70歳になったら辞める」とか、「75歳を聞いたらどうしても辞める」とか。——先生、先生がおやめになったら、教会は無牧になりますよ。先生はお元気ですから、せめて様子を見るために、76、77まで、お元気な限りやっていただけませんかとお願ひしますと、
「私は75でやめることを決めてある」と(言われます)。

それをじ〜っと聞いていた私に、私の友人の八木先生が仰った——死ぬまでやると言う牧師も、どうしても辞めると言う牧師も、両方ともわがままだねえと(大笑)。
両方ともわがままなのですよ。だけど私の口からそんなことは言えません(大笑)。だけどそれをじ〜っと聴いていますと、ものすごく不健康ですね(大笑)。

じ〜っと聴くタイプもいるんだろうと思いますが、私はアメリカにいた時に、アメリカ人の友人から言われました。
「お前は日本人なのにどうしてそんなに生意気なのだ」(大笑)と。
日本人はもう少し謙遜な民族だと思っていたけれども(笑)、どうしてお前はそんなに生意気なんだと言われた位、生意気な私がじ〜っと聴いていますとねえ、どんどん髪の毛がなくなって(大笑)いきまして……。

さて、あらためて、モーセの謙遜を考えてみたいと思います。
つまり、謙遜とはまさにこういう場面に現れて来ます。

1) モーセは気負わない。

モーセは自分だけが指導者だと思ったことはない。
確かに以前に、モーセにはそういう意識があったのかもしれない。自分だけが民の指導者だと思っていたことが確かにありました。これはずっと前に学びました。

まだ（イスラエルの民が）荒野に入って間もない頃に、イスラエルの民が全部難しい問題課題や人々の争いの解決をモーセの所に持って来ます。そしてモーセは朝から晩まで天幕の外で民の問題を聞いています。そんなモーセの気負いを砕いたのは、モーセの妻のお父さんでした。——そんなことをやっていたら、あなたも参ってしまうし、民も参ってしまう（出エジプト 18：17～23）。

それを境に彼は、一人ですべてを担うという気持ちが、そもそも気負いすぎではないかと思うようになりました。そして、モーセはイスラエルの民族の中に、長老という制度を導入します。民数記の 11 章の 26 節～30 節までをちょっと交替に読んでいきたいと思います。ここにも、そのモーセの姿勢がよく現れています。

26 そのとき、ふたりの者が宿営に残っていた。ひとりの名はエルダデ、もうひとりの名はメダデであった。彼らの上にも霊がとどまった。——彼らは長老として登録された者たちであったが、天幕へは出て行かなかった——彼らは、宿営の中で預言した。
27 それで、ひとりの若者が走って来て、モーセに知らせて言った。「エルダデとメダデが宿営の中で預言しています。」
28 若いときからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアも答えて言った。「わが主、モーセよ。彼らをやめさせてください。」
29 しかしモーセは彼に言った。「あなたは私のために思ってねたみを起こしているのか。【主】の民がみな、預言者となればよいのに。【主】が彼らの上に自分の霊を与えられるとよいのに。」
30 それからモーセとイスラエルの長老たちは、宿営に戻った。

場面はわかります。

主の霊が下って預言をするということはモーセの単独の仕事であった。でもある時、長老すべてに、神さまは霊を与えてくださった。そして、この長老、若い長老ふたりですが、天幕の中で預言した時に、それを聞いた人たちが
「どうかやめさせてください。預言をするのは、モーセ先生、あなただけの仕事です」と言った時に、モーセは、
29 節に「私はそうは思っていない。あなたは私のために思ってねたみを起こしているのだろうけれども、私は【主】の民がみな、預言者となればよいのにと思っています。【主】がご自分の霊を彼らの上に与えられたらなあとは願っている」と（答えたのです）。

モーセは自分ひとりで担おうという気負いを全部捨てた人間です。モーセはあくまでも、自分がトップであるならば、（神さまが）与えてくださった使命を、職を淡々とこなしているだけで、それによって自分が周囲の人々より偉いとか、上だとか、私は全く考えていない。主からゆだねられたこと、それをそれぞれが忠実に行えば良いのであって、人の上に立つなど、モーセには何の意味もない。私はみなが預言者になればよいと真剣に思っている。というのは、私は上下関係に全く頓着していない——これがモーセの謙遜の現れの一つです。

2）謙遜なモーセは、反論しない。

12 章の 1 節にミリヤムの批判が出てまいりますけれども、その間にモーセは一度もことばを発していないのです。2 節——

2 彼らは言った。「【主】はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちと

も話されたのではないのでしょうか。」【主】はこれを聞かれた。

ミリヤムから発せられたモーセに対する批判を、モーセは聞いていました。しかし、それ以上に、神さまも聞いておられた。この聖書の箇所にも、モーセの反論も弁解も一言も記されていない。あたかもモーセは、神さまが聞いておられることを知っているかのように、そこにすべての慰めを見い出しているかのように、ひたすら黙っています。

そして、神さまは、実に見事に聞いておられました。そして、すぐにアロンとミリアムを呼び出されます。4 節――

4 そこで、【主】は突然、モーセとアロンとミリヤムに、「あなたがた三人は会見の天幕の所へ出よ」と言われたので、彼ら三人は出て行った。

6 節――（～8 節を続けて読まれる）

6 仰せられた。「わたしのことばを聞け。もし、あなたがたのひとりが預言者であるなら、【主】であるわたしは、幻の中でその者にわたしを知らせ、夢の中でその者に語る。
7 しかしわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。
8 彼とは、わたしは口と口とで語り、明らかに語って、なぞで話すことはしない。彼はまた、【主】の姿を仰ぎ見ている。なぜ、あなたがたは、わたしのしもべモーセを恐れずに非難するのか。」

神さまはモーセが浴びた非難を聞いておられた。モーセはそれを知っているかのように、一言もしゃべらなかった。モーセが謙遜でいられたのは、何を言われようが、どんな批判を受けようが、黙っていたのは、神さまが聞いておられるということを、モーセが知っていたからです。神さまが見ていてくださる、神さまは私の味方であってくださるということを知ってたがゆえに、モーセはじっと黙っていました。

そこで、4 節にありますように、「【主】は突然」というように、主は突然、すばやく、劇的に介入されます。そんなに早い解決もあるでしょうけれども、時に私たちは何年もその批判にさらされる、じ～っと我慢させられる場面だってあるわけです。

それでも、主は絶対に聞いていてくださる。そしてどこかで、どのようになされるかは解りませんが、必ず主は報いてくださる。その希望がある時に、私たちはごっくりと、自分に浴びせられた非難を飲み込むことが出来る。私たちは往々にして飲み込むのです。

反論の言葉を飲み込むと、おなかを下すこともあります。人の批判と言うのは毒気があります。その毒を浴びせられると、そして何も反論せずに飲み込むと、毒にあたります。そしてしばらく気分が悪い。でもたとえ飲み込んだとしても、神さまは聞いておられる。絶対に報いてくださる。それがいつになるかはわからない。でも報いてくださる。この希望に励まされて、私たちはあえて反論せずに言われたことを飲み込むことも実は多々あるのです。

「スヌーピー」の漫画で、こういうシーンがあります。

高飛車な姉ちゃんルーシーがテレビを見ていると、そこに気が弱い、それでもすごく知的な弟のライナスが入って来るのですね。ルーシーはこう命令します。「あんた、台所に行って、ジュースを持って来なさい」
ライナスは言うのです。
「そんな要求にぼくが応えたとして、じゃあ姉ちゃんは、ぼくのために何をしてくれるんだい？」

ルーシーは言います。
「あんたが75歳になったら、誕生日ケーキを焼いて上げるわ」(笑)
ライナスは、黙って台所に向かいながらこう言います。
「まあいいか。人生、先に期待できるものがあるから、それでよしとするか」(笑)

スヌーピーの作者のチャールズ・シュルツはものすごく賢いクリスチャンで、——私はいつも言います——そこかしこに、聖書に基づく福音の真理を、実に見事に埋め込んであの漫画を描いているのです。

理不尽なことも沢山ある。反論したいことも沢山ある。たとえ勝てなくても、反論ぐらいはしておきたいと思うことが多々ある。
そこを私たちは、往々にしてぐっと飲み込んで、おなかを下して病気になってしまう。

でもそんな私たちは、ライナスのように考えてみようではないかと(シュルツは言いたいのでしょう)。
たとえ75歳になったときかもしれない。でも「人生、希望がないよりは、希望がある方が良いか」と。
そして、神さまが与えてくださる希望は、岩のように、山のようには動かないです。

一言も反論しないモーセに、神さまはすぐに出て行って、そして事の決着をなさった。
すぐにではないのかもしれない。でも必ず私たちに報いてくださる。
私たちが飲み込んでしまえばしまうほど、神さまはまた苦しんで、私たちのために物事の決着を図ってくださるというのは、私たちの力強い希望ですね。

3) 謙遜なモーセは、愛を失わない。

1 番目は、謙遜なモーセは気負わないという話をしました。
2 番目に、謙遜なモーセは黙っている。反論しない。ひたすら神さまの報いに期待をかけているという話をしました。
3 番目に、謙遜なモーセは愛を失いません。

9 節を見てください。(12:9~13 を読まれる)

9【主】の怒りが彼らに向かって燃え上がり、主は去って行かれた。
10 雲が天幕の上から離れ去ると、見よ、ミリヤムはツァラアトになり (***)ツァラアトというのはハンセン病とのご説明)、雪のようになっていた。アロンがミリヤムのほうを振り向くと、見よ、彼女はツァラアトに冒されていた。
11 アロンはモーセに言った。「わが主よ。私たちが愚かで犯しました罪の罰をどうか、私たちに負わせないでください。
12 どうか、彼女を、その肉が半ば腐って母の胎から出て来る死人のようにはしないでください。
13 それで、モーセは【主】に叫んで言った。「神よ。どうか、彼女をいやして

ください。」

モーセはミリヤムのためにとりなしをします。
アロンはモーセにとりなしを願いました——わが主よ。私たちが愚かで犯しました罪の罰をどうか、私たちに負わせないでください（11 節）。
謙遜な私たちはこう言うのですね。

私たちを、むやみやたらに批判した相手が転びましたら、私たちは思わず「ハレルヤ、ざまー見ろ」ですよ（笑）。
ハレルヤ。ざまー見ろ——こう思います。でもそんな気持ちは謙遜なモーセにはなかった。

アロンは、ミリヤムといっしょに批判した側ですから、「どうか私たちの罪の罰を私たちに負わせないでください」（とモーセに願います）（11 節）。
でもモーセも、同じように、ミリヤムとアロンの罪を自分の内側に取り込んで、13 節に、「神よ。どうか、彼女をいやしてください」と祈っている。
ミリヤムは謙遜なモーセによって守られます。

この教会で、感謝なことに、私たち牧師にぶつかって来る方々はおられないです。でも仮におられたとしても、そういう設定で、おられても何の不思議もない。
こんなにあらゆることを忘れてしまう（大笑）牧師もいないなあと思いますし、こんなに典型的な B 型という人間だと思いますけれども、よく付き合っておられるなあとは思いますよ。
でも皆さんは本当に私に突っかかって来ない。
でも仮に突っかかって来たとして、という前提で話を聞いていただきたいと思います。

仮に誰かがものすごく突っかかって来たとして、そして皆さんの中にモーセのように謙遜な方がいて、その方の血気盛んな批判までも飲み込んで、そしてその方のために祈る。
つまり牧師のために祈るのではなく、その方のために祈り、その方を自分の内側に取り込んで、
「主よ、あの兄弟は、あの姉妹は、今このようにして、教会の中で一つの不平、不満、批判の嵐をまき起こしておられますけれども、主よ、どうか彼女を憐れんで、彼を憐れんで、彼を許し、彼の赤く燃えるような批判の心を癒してください」と祈るなら、
皆さんはこの世界に類まれなほど、謙遜な人だと、神さまは評価してくださる。

4）もう一つ目を留めていただきたいのですが、ミリヤムは結局 7 日間は癒されないのですが、15 節をちょっと一緒に読みたいと思います。

15 それでミリヤムは七日間、宿営の外に締め出された。民はミリヤムが連れ戻されるまで、旅立たなかった。

民はミリヤムが連れ戻されるまで、旅立たない。
民も見ているのですね。——つまりミリヤムはあんなに頭に血を上らせて、頭から湯気を出して、自分の弟モーセを批判し、しかも故なく、どうしようもない問題で批判し、この自分の弟を引きずり下ろそうとしている、そのミリヤムを神さまは罰せられた（という事態を）。

七日間、宿営から締め出された。——いわば自業自得、民を混乱させ、教会をこれほどまで混乱させたのであれば、ミリヤムは教会の外に締め出され、「さ

「あ私たちは旅立とうではないか」と言うのが普通です。

でも民はミリヤムが戻って来るまで旅立たない。
ミリヤムがこれまで真実に主に仕えてきたことを民はよく知っているのです。
1回、2回の過ち、そんなものは誰にでもあることは民はよく知っている。
ですから、民はもう一度ミリヤムを女預言者として、民の、私たちの尊い指導者として群れの中に迎えて、それから 16 節、パランの荒野に旅立って行くわけです。

牧師たちはよく言います。あれほど痛烈にあたってくるなら、主よ、どうかあの方をよそへ送ってください（大笑）と。でもよその教会でも同じような問題を起こすので、もしかしたらうちの教会にいてくださった方がいいのかもしれないけれども、み心ならば（笑）それっていう話も出ないわけではないのですね。

けれども、謙遜なモーセはそんな話、一言もしないです。
その方のために一生懸命祈る。そして、神の民が宿営の外から戻って来た時に、ミリヤムを迎えて、もう一度ミリヤムを大切にしながら歩みを進めていく。

もしそれが私たちの教会にできるとしたならば、私たちは本当に愛ある、主の御前に謙遜な教会であると言っていただけではないのでしょうか。

☆ お祈り

恵み深い天の父なる神さま、なるほど私たちは人から批判されたときに、自分の謙遜さが試されるんだなあ、そして本当に謙遜でない自分が明らかにされるんだなあ、考えさせられる聖書の箇所を共に学ぶことができましたことを感謝します。

そしてこの教会に謙遜な者を与え、謙遜な取り成し手を与えてください。愛ある教会として、だれひとり宿営から離れることなく、共に歩いていくことができるように私たちを支えてください。

また、もし私たちが今、批判の嵐の中にいましたならば、主よ、どうかあなたが（民数記 12：4 で）突然介入してくださったように、私たちが倒れてしまう前に、主よ、どうか私たちの事態に介入して下さり、私たちを助けてください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。